

佳作

『アヘン王国潜入記』 高野秀行著

文学部 文学科1年 中井雛野

誰も行かないところへ行き、誰もやらないことをやり、それを面白おかしく書く、をモットーとして、ノンフィクションを書き続ける作家、高野秀行。今日も高野は我々日本人の知らない非日常の世界を冒険し、ペンを走らせる。学生時代、探検部に所属した高野は伝説の怪獣モケーレ・ムベンベを探しにコンゴ奥地のジャングルへ。探検は難航を極めサバイバルは七十八日にも及んだ。この探検をまとめた『幻の怪獣・ムベンベを追え』で作家デビュー。今ではそれが職業だ。冒険が楽しくて仕方がない。高野の心を掻き立てる未知なるものへの好奇心は、大人になった今でも止むどころか、増すばかり。ある時は砂漠に。ある時は湖に。シルクロードを辿った時には、誤ってインドに密入国し、国外追放処分となった。やりすぎとは言われても、これが高野のやり方だ。情熱は留まることがない。

「距離や体力の問題で物理的に行きにくい場所には、おおよそ行きつくしてしまった。次はどこに行こう。」

そんな高野が選んだ冒険先はミャンマー北部に位置する反政府ゲリラの支配区、ワ州。一昔前まで、ここら辺一帯はゴールドトライアングルと呼ばれ、麻薬密造地帯であった。「であった。」いや、正しく言えば、経済成長に伴い、取り締まりの厳しくなったタイを除いたミャンマー、ラオスでは今でも貧しい農家にとっての大きな収入源として、ケシ栽培が慢性的に行われている。ワ州に足を踏み入れるまでに課題は山積みで、ミャンマー政府の顔色を窺いながらの、マフィアとのコネクション作り。治安なんてよくないのは当たり前。二度と母国に帰ることができないかもしれない。しかし、どうしても行きたかった。好奇心が止まらないから。大冒険に向かうまでに気づけば二年近くがたっていた。そして、やっとのことで高野の大冒険は始まりを告げる。単身、ケシ栽培が行われる小さな村に乗り込んだ。政府じゃない。軍部じゃない。知りたいのは生きるためにケシ栽培に従事する人々だ。だからこそ、種まきから収穫までの七か月という長い時間を地元住民と共に、一村人として生活した。その生活模様はアヘンで生み出される莫大な金銭とは裏腹に、質素で実に原始的。そんな時、高野の目にケシ栽培はどんな風に映ったのか。好奇心が強すぎるゆえに、若干のアヘン中毒に陥った高野の姿もご愛敬。ケシ栽培は農業か。それとも犯罪か。答えを一つに絞るのはどうにも難しい。